

e-dream-s 通信

No.57 発行：2005年6月12日 特定非営利活動法人 イー・ドリームズ

目次

- | | | |
|------------------|------|------|
| 1. 笑い飯 | 辻荘一 | p. 2 |
| 2. 鰻と Topaz Moon | 井川好二 | p. 4 |
| 3. おもいでのためから | 中川房代 | p.11 |
| 4. 絵のある我が家 | 山田昌子 | p.13 |
| 5. 異世代交流 | 塚本美紀 | p.15 |
| 6. ドキドキの理事会 | 矢神尚久 | p.16 |
| 7. 社会復帰！？ | 田辺恵美 | p.17 |



第19回理事会 和やかに議事は進む（撮影 仙崎裕右氏）

笑い飯¹

代表理事

辻莊一

うつらうつらして乗り越えてしまい、阪急河原町から慌てて一駅引き返し、阪急烏丸駅を降りて階段を上がる。四条通を少し東に歩き大丸の角を右に折れて東洞院通を上がると、いかにも京都らしい町家の向かいに京都市女性総合センターウィングス京都がある。8月の総会を控えてのイー・ドリームズ理事会の会場である。モダンな建物が町並みにしっくり馴染んでいる。

鳴門、広島、果てはウランバトルにまでわたって様々な場所で行われたイー・ドリームズ理事会だが、5年ぶりに第1回の理事会が行われた京都に戻って来た。理事会では本年度事業報告および決算報告、来年度の事業計画および予算など重要な案件を議事次第に従って形通り処理していくのだが、実は一番重要なのは理事が顔を突き合わせ時間を共有して話をするのである。そしてその後は皆でおいしい食事をするのである。

インターネットの普及によりサイバースペースという仮想空間ができ、この目には見えない空間が現実世界に大きな影響を与えるようになっている。事実、イー・ドリームズの諸連絡も殆どがe-mailで行われるようになっている。日本国内はもちろん海外との連絡にe-mailはもはや不可欠でいってよい。もちろん教育用写真アーカイブがサイバースペース上のデータベースであることはご存知の通り。

しかし全く顔を会わさないサイバースペースを通じてのコミュニケーションだけですべてうまく行く訳ではない。サイバースペースを駆け巡るメッセージやデータの裏には生身の人間がいる。顔を合わせなくても用が足りる時代になったからこそ逆に生身の人間同士が時空間を共有することが貴重で意味のあることになったとも言える。

お互い顔を見て、声を聞き、時には笑い声がおこるインターアクションを重ね

¹ 吉本興業所属のお笑いコンビ。ボケとツッコミが交互に入れ替わるという独特の芸風を持つ。

る中で化学反応が起こり、予期しないすばらしいアイデアが提案されたり、将来への希望が湧いて出たりするのである。

将来イー・ドリームズが劇的に発展し世界中に理事が散らばるという事態になれば同様のことをテレビ電話会議で、行えるようになるかもしれない。テレビ電話なら互いの顔も見える、声も聞こえる。

「ただテレビ電話会議もそこまでかな」と、皆で京都岡崎の閑静な住宅地の中にある京料理の店「洛翠²（らくすい）」の「植治の庭」を散策した後、重箱に納められた昼食を楽しみながら考えた。さすがにサイバースペースの会議では、一緒に美味しいものを食べるというわけにはいかない。前夜楽しんだ「サルティンバンコ」でイタリア料理とワインを行き届いたサービスもサイバーではなく体を運んで時間と場所を共有すればこそ、である。

もちろん NPO として理想や目的がなければ話にならないが、「一緒に笑い、話をして一緒に飯を食う」ことがその理想や目的を達成するために大きな力となる。

ECAP2005 のために 6 月末に韓国に出向き、韓国の先生方と膝を突き合わせて話をしてくるが、これも e-mail だけでは用事が済まないということではなく、体を運び顔を突き合わせることの大切さを考えてのことである。

そして ECAP そのものも日韓の教師が実際に会って話をするというところに大きな意義がある。「笑って話してご飯」そこからすべて始まるのである。

²岡崎にある料理旅館。明治時代の造園家、7 代目小川治兵衛の庭があることでも知られていません。京情緒あふれるお部屋からは、その名庭を一望できます。またお食事だけでも承ります。目で楽しみ、舌で楽しむ、趣向をこらした京料理をゆっくりといただけます。夜には庭園がライトアップされ、また違った趣。

http://kyoto.jr-central.co.jp/kyoto.nsf/spot/sp_rakusui

鰻と Topaz Moon

井川 好二

日中の気温が30度を越えて、汗が吹き出る。湿度も負けずに高くなって、街を歩けば、ああ、冷房が恋しい。そんな夏らしい季節になると、無性に鰻が食べたくなる。いよいよ日本の夏である。

地下鉄の駅から、真新しい階段をトントン上がりきると、市内を南北に流れる川が見える。暮れなずむ川面を渡る風が、涼しげに川端の柳の枝へ。中州³に近い河岸は、ウォーターフロント開発されて、劇場や美術館、高級ブティックや品揃えのいいワインショップや気の利いたレストランなどが入った、総合ビルになっている。

今日は、以前に何回か行ったことのあるイタリアンではなく、柳川⁴の鰻を出す和食の店に行く。冷酒に「せいろ蒸し⁵」が旨いのである。

「2月に、ソルトレーク・シティへ行ってん」

「寒かったでしょ」

「うん。けど、面白かった。日系人にもたくさん会うてね」

「そう。ユタにも日系アメリカ人、結構います」

Bはホノルル出身の日系2.5世である。父親が一世で、母親が二世だから、2.5

³なかす【中洲・中州】川の中で、水面に出て島のようになった所。なかす。
[株式会社岩波書店 広辞苑第五版]

⁴やながわ【柳川】福岡県南西部の市。もと立花氏11万石の城下町。筑後川と矢部川とに挟まれた三角州に位置し、干拓地と水路が多く、水郷として知られる。人口4万3千。[株式会社岩波書店 広辞苑第五版]

⁵せいろう【蒸籠】鍋・釜の上ののせて、糯米(もちごめ)・団子・饅頭(まんじゅう)・茶碗蒸しなどを蒸す器。木製の框(わく)があつて、底を簀(す)とし、下から湯気を通す。せいろ。[株式会社岩波書店 広辞苑第五版]

世なのである。来日して20年以上。日本人女性と結婚して子供が二人。日本語もうまくなった。以前の職場の同僚で、付き合いもおよそ20年。今では別々の大学で教えていて、時々、大阪で待ち合わせて飲みに行くことはある。しかし、今日は、旅の空。同じ時期に西へ出張することがわかり、ホテルのロビーで落ち合って、旨いものを食べに行くことにした。

「戦時中、ユタ州には、日系人のインターンメント⁶があったんやね」
「そう。Relocation Camp⁷とも云いますね。カリフォルニアのマンザナー(Manzanar)⁸が、特に有名。けど、ユタにもトパズ(Topaz)と云うキャンプ」
「1万人以上が収容されてたんやて」
「チウラ・オバタ、収容されてた日系の画家ですけど、そのチウラ・オバタの画集 *Topaz Moon*⁹って云うのがあります。墨絵のようで、ちょっと、良いです」
「Topaz Moon か」

ちなみに、ここで云う Internment Camp とは、

日系アメリカ人強制収容所

⁶ internment [名] 1 [U] 抑留, 監禁・an ~ camp (捕虜・敵国人・政治犯の) 収容所. 2 抑留期間; 抑留状態, 監禁の身. 【プログレッシブ英和中辞典第3版】提供: JapanKnowledge

⁷ Most historical references describe the camps as *internment camps*, although others favor the name *relocation camps*. Others, more critical of this action, refer to them as *detention camps* or *concentration camps*.

http://en.wikipedia.org/wiki/Japanese_American_internment#Terminology:_Internment,2C_relocation,2C_or_concentration_camps.3F より。

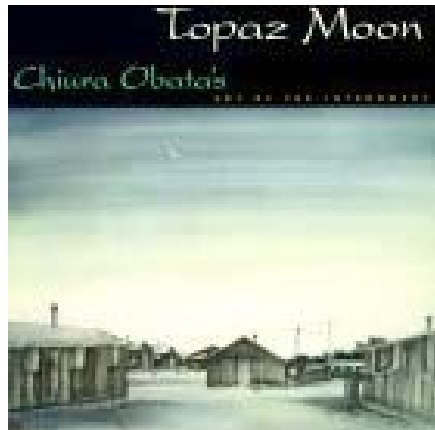
⁸ Manzanar National Historic Landmark (better known as Manzanar War Relocation Center) was a Japanese American internment camp during World War II that operated near Independence, California. Manzanar was one of ten camps at which Japanese Americans, both citizens and resident "aliens," were detained as a "precautionary measure" during World War II. Located at the foot of the imposing Sierra Nevada in eastern California's Owens Valley, Manzanar has been identified as the best preserved of these camps by the United States Park Service which maintains and is restoring the site as a U.S. National Historic Landmark and a U.S. National Historic Site.

<http://en.wikipedia.org/wiki/Manzanar> より。

⁹ Topaz Moon: Chiura Obata's Art of the Internment

<http://www.amazon.co.jp/exec/obidos/ASIN/1890771260/249-0322276-2360317> 参照。

第二次世界大戦中、アメリカ政府は12万人以上の日系アメリカ人を、西海岸から強制的に立ち退かせた。かれらの7割はアメリカ生まれの二世で市民権を持っていたにもかかわらず、中西部に設けられた10ヶ所の強制収容所に送られた。ハワイの日系アメリカ人は、人口比率がとても大きかったので、強制退去を強いられた人々は少数にとどまった¹⁰。



*Topaz Moon*¹¹

「お酒は、日田¹²の『山水¹³』にしよか」

「冷酒が美味しいですね」

「そう。夏はビールもええけど、鰻には、シンプルな辛口冷酒」

「ほお、これ、素朴な味ですね」

¹⁰ http://www.janm.org/jpn/nrc_jp/internfs_jp.html より。

¹¹ <http://www.amazon.co.jp/exec/obidos/ASIN/1890771260/249-0322276-2360317>

¹² 日田【ひた】大分県の西部,日田盆地の中心地。古代・中世には日下部氏,のち大蔵氏(日田氏)が勢力を持ち,日田荘が置かれた。江戸時代は日田代官,のち西国筋郡代が幕領を支配。筑後川水運が開けて商業が発達し,御用商人・金融業者が出現。広瀬淡窓・大蔵永常らの学者が出,近代には日田杉などによる林業・木工業が発展した。小鹿田(おんた)焼も著名。1940年市制施行。[岩波日本史辞典]

¹³ 九州の小京都、水郷日田：当蔵は、大分県が福岡県と熊本県と隣合う山の中、盆地の町、九州の小京都、水郷日田と呼ばれています。大分県日田市にあります。江戸時代は西国郡代が配置され、九州諸藩の中心とし、経済、文化の面で大きく発展しました。幕末の頃、広瀬淡窓の開いた「咸宜園」は国内最大級の私塾でした。水郷日田の名水を求めて現在、当時の面影を残す古い町並み、広い川面の三隈川の鵜飼、遊船、温泉に多くの観光客が訪れています。また、名水を求めて、ニッカウイスキー、サッポロビール、コクボ製氷と“水”の産業が進出してきています。

http://www7.airnet.ne.jp/kontatsu/kuramoto/oimatsu/h04_main.html より。

「お酒の味、わかるようになったんや」
「おかげさまで。日本に長いですから」

鰻は、むろん、身に脂が乗っていて、しかもさっぱりとしているのが、旨さの基本だが、蒲焼きにしろ、八幡巻き¹⁴にしろ、鰻の皮の焦げ目の食感と云うことがあって、タレのからまった香ばしさが良い。目当てのせいろ蒸しが来るまで、その香ばしい八幡巻きと、鰻巻き¹⁵に白焼き¹⁶の鰻尽くしに、酒がグングンすすむ。

「田舎だったでしょ、ユタは」
「そう、けど、田舎やから、人がええ」
「なるほど」
「サンドラって云う三世に、日系の墓地へ案内してもらた」
「へえ、それは良い経験ですね」
「昔は、差別されて、白人と一緒に墓地には埋葬させてもらえんかったんやて。それで、丘を大分登って、街を見下ろすところを日本人墓地にした」
「モルモンの街ですからね」
「けど、ソルトレーク・シティの人口が増えて、都市開発が進んだ今では、その丘の上の日本人墓地のあたりの地価が、見晴しエエ云うんでから、随分高騰してるんやて」
「Ironic ですね」

戦後、Topaz のキャンプから解放された後、サンフランシスコなどの西海岸へ戻らず、ユタに留まった日系人も多かったと云う。強制収容の際、すべてを失ってしまったので、戻っても仕方ない、この地で一から出直そうと思ったので

¹⁴ やわた まき〔やはた 〕【八幡巻(き)】煮て調味したゴボウを芯(しん)にし、穴子・鰻(うなぎ)などで巻いて付け焼きにした料理。ゴボウの産地、八幡にちなむ。[大辞泉 提供：JapanKnowledge]

やわた〔やはた〕【八幡】京都府南西部の市。石清水(いわしみず)八幡宮の門前町、淀川水運の河港として発達。住宅地化が著しい。八幡ゴボウの産地として知られた。人口七・五万。 [大辞泉 提供：JapanKnowledge]

¹⁵ う まき【鰻巻き】蒲焼かばやきにしたうなぎを芯にして巻いた卵焼き。[株式会社岩波書店 広辞苑第五版]

¹⁶ しら やき【白焼】(魚肉などを)表面に何もつけずに焼くこと。また、焼いたもの。[株式会社岩波書店 広辞苑第五版]

あろう。ソルトレーク・シティには、一時、日本人街ができ、ホテルやレストラン、日本人キリスト教会や仏教寺院も、建てられたと云う。その旧日本人街も見せてもらった。



その日系人たちが、葬られている日本人墓地。日本を遠く離れて、死んで行った一世たちは、やはり故国へのやるせない思いを募らせていたのだろうか？

ソルトレーク・シティの日系人墓地

Photo by Koji Igawa

その墓地の真ん中に、白い石碑があって、真ん中に漢字で「忠魂碑」と書いた銅製のプレートが嵌め込んである。基底部には、英語で、“In grateful remembrance of our loyal sons who gave their lives serving our county during World War II.” と刻んであって、この「忠魂碑」に祀られているのは、第2次大戦中、アメリカ兵として戦った日系人だと分かる。つまり、our country とは、アメリカ合衆国。しかし、そのいかにも日本的な「忠魂碑」と云う漢字に、やや不思議な思いもする。

おめあての「せいろ蒸し」がやって来る。蓋をとると、暖かい湯気がホワホワ上がり、甘く香ばしいにおいが広がっていくところを、中年男が二人、ふうふう云いながら、旨い旨いと食べる。冷酒をお互いに注いでは飲む。飲んで、食べる。そこへ塗りの椀に入った「肝吸い」がやって来て、役者がすべて揃う。

「日系は可哀想やったね」

「shikata ga nai¹⁷」

「ええ？」

「*Farewell to Manzanar* って本があって、その中の Chapter のタイトル¹⁸」

「仕方が無い？」

「そう。日系の我慢の気持ち」

「一世は、鰻食べたかったやろ」

「ソルトレークでは、無理」

「仕方が無い」

さんざ飲んだり食べたりした払いを済ませ、一階に降りて、ビルの外に出ると、柳に川風が気持ち良い。夏とは云え、6月はまだかかり。夜になると気温も下がって過ごしやすい。ネオンの陰に、三日月が見える。

「Topaz Moon かな？」

「さあ？」

「もう一軒行こか？」

遠いソルトレーク・シティの日系アメリカ人に思いを馳せていると、傍にいる在日日系人のことも頭を過る。そして、他人のことばかりではなく、日系日本人である自分のことも、なんだか、心配になってくる。

エエィ、こういう成り行きになった今宵は、もっと酒の力を借りて、逆巻く思いを沈めるより、仕方が無いようである。(Saturday, June 11, 2005)

¹⁷ shikata ga nai (仕方が無い) is a popular phrase used in Japanese literature and media that has also made inroads into Japanese-American literature as well. The phrase is loosely translated as "it cannot be helped", and is frequently used to describe a quiet resolution to maintain dignity in the face of an unavoidable tragedy or injustice. In more casual settings, the phrase is abbreviated shou ga nai.

http://en.wikipedia.org/wiki/Shikata_ga_nai より。

¹⁸ *Farewell to Manzanar* is a book published in 1972 by Jeanne Wakatsuki Houston and James D. Houston. *Farewell to Manzanar* is Jeanne Wakatsuki Houston's memoir of herself and her family being detained at the Manzanar internment camp after the attack on Pearl Harbor, which got the United States into World War II. Jeanne was seven years old at the time. Wakatsuki Houston and her parents and siblings are Japanese American. One of the chapters "shikata ga nai", is a reference to a common phrase used by Japanese-Americans to cope with their helplessness in the situation.

http://en.wikipedia.org/wiki/Farewell_to_Manzanar より。



ソルトレーク市日本人墓地に
ある「忠魂碑」

Photo by Koji Iagwa

おもいでのため

中川房代

わたしは大きくなったらかごふさんになっていろいろなことをしてみたいのです。それからいろいろなくすりをつくってみたいのです。

ガリ版印刷¹⁹の文集を見つけた。「中ぶ小学校 1ねん2くみ」とある。小学校1年生の3月、2年生への進級を前に「将来なりたい職業」をテーマに書いたクラス文集だ。

小学生1年生の私は「看護婦になりたい」と書いていた。薬を扱いたいとあるから、もしかしたら「薬剤師」か「薬の開発研究者」なのかもしれない(?)。ガリ版印刷は、やすりの上に、ろう原紙を載せ、鉄筆で書く。強く書きすぎると穴があいてしまうし、間違えると修正が面倒だった。先生に一人ずつ出席番号順に呼ばれ、教室の前の方に置いてある先生の机の前に座って書いたのだが、とても緊張したのを今でも覚えている。

文集の表紙には、クラスで上手だった子の作品昆虫採集を描いた紙版画と文集の題名「おもいでのため」のレタリング文字。37年も前のものだから、黄色だった表紙ももう茶色に変色し周りにはボロボロ、綴じるために使っているリボンももはや何色だったのか分からない。大学進学で下宿生活を始める際、18歳の私は、「おもいでのため」を、持っていく荷物の中に入れたのだった。

そして、中学生の私は、老人介護など福祉の道に進もうかと考えたり、英語への興味から英語に関連した仕事もいいなあとも思っていた。何か、社会や人のためになる仕事に就きたいと思い始めたのはこの頃だったと思う。ちょうど、祖母が病気で倒れ自宅で療養生活に入った時期でもあり、世の中は「オイルシ

¹⁹ 謄写印刷とも、孔版印刷ともよばれる。この印刷方式では、インクは上から原版の小さな孔をとって下の紙に定着されるので、文字や絵柄はえがいたとおりに印刷される。

「ガリ版印刷入門」 <http://www.honco.net/japanese/02/page4-j.html>

ショック²⁰」のパニックの真っ最中。毎日のように、一家総出でトイレトーパーや砂糖を求めてスーパーの長蛇の列に並んだ。明日にも「東海大地震」が起こるといふ風評が何度となく流れ、翌日着る服を枕元に置いて寝る日が続いた。明日にでも皆死んでしまうのではないかと真剣に考えていた。土曜日の学校からの帰りには、「生きていたら月曜日に会おうね！」と友だちと語り合っていた。社会に関わる仕事をしたいと思ったのは、そんな環境も影響していたのかもしれない。

感傷的な思い出話に付き合わせてしまい、すみません。

ふと見つけた文集に、今に繋がる昔の自分を思い出した。今でもそうだけど、当時から結構ウジウジもしてたけど、それなりにいろいろ考えていた(と思う)。社会に繋がっている自分を想像していた。そんな子ども時代があった。今に継承されているのは、「社会の役に立ちたい」「人のために働きたい」という気持ち。

「おもいでのため」の最後には、担任の先生の文章がある。

そして、だれでも、いっしょうけんめいがんばれば、じぶんのなろうとのぞんでいるものにもなることができます。

このぶんしゅうは、みなさんの手でかかれたとうといものです。大きくなってからときどきだしてよんでみると、とてもたのしいものです。いつまでもだいじにしまっておいてください。

看護婦にはならなかったけど、でも、自分の望んでいた気持ちは、大部分実現できているのかなあと思った、ちょっと満足な気持ちになった 2005 年 6 月 11 日。

²⁰ 「第一次オイルショック」1973～1974年。原油価格高騰による経済混乱のことを指す。石油危機、石油ショックとも呼ぶ。詳しくは、例えば、「ウィキペディア(Wikipedia)」<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AA%E3%82%A4%E3%83%AB%E3%82%B7%E3%83%A7%E3%83%83%E3%82%AF> を参照。

絵のある我が家

e-dream-s 理事 山田昌子

我が家には、絵画が色々なところに掛けてある。大原女^{註1}姿の水彩画は、子供の時から私が好きだった絵だ。カメルーンで、ある学校の女校長先生からいただいた、アフリカ女性をモチーフにした木製の絵画もある。

我が家に絵が多いのは、母が絵が好きだというせいもあるが、母が元気だった時、ちぎり絵^{註2}に凝っていて多くの作品を作ったからだ。母は作品を作っては家に飾った。額に入っていないくても、色紙(しきし)を使って作った、四季の折々の花や景色のちぎり絵が、茶の間だけでも10は飾ってある。母が時間をかけて作成した創作ちぎり絵もある。昔訪れた農村の藁ぶきの家や家族旅行をした瀬戸内海の橋、また子供たちが近所の公園で砂場やジャングルジムで遊んでいる姿。御所で雪だるま作りに汗を流している子供たちのちぎり絵もある。昔小学校の教員をしていた母は、風景よりも子供たちや人のちぎり絵を作るのが好きだった。雑然と飾られていてもっと整理したらと思うこともあるし、私には母の絵が上手いのかどうか分からない。が、母の影響で、私も絵が好きだ。

母の絵でいっぱい我が家だが、中に私が自分で欲しいと思って手にいれた油絵がひとつだけある。縦 45cm、横 150cm の大きな絵。ポカリ(ネパール)を訪問した時ふと立ち寄った油絵屋で衝動買いをした。ネパールの若い絵描き Kirin が筆をとったもので、「ゆくゆく有名になるかもしれません」と言われ、ちょっぴりその気になった。が、それよりもむしろ小さい油絵屋の壁一杯に掛けられていたその絵が、私を呼んでいるように思えた。大きな絵だったので、しわにならずに持って帰るのはひと苦労。額は特別注文しなければいけなかった。実際、額の方が値がはった。

それでもその絵にこだわったのは何故だろう。雪で真っ白のポカリの山、マチャプチャレをバックに、広い緑の草原を5人のネパール人が歩いている絵画。左端の赤く長い民族衣装の男は背中に大きな籠をしょっている。グレーの大きなショールで上半身を巻いているのは女性だろうか。緑のシャツの男は短いズボン履き、青年のようだ。白いシャツの男は長ズボンで壮年の男のようだ。それぞれ異なった帽子をかぶっている。白い方はイスラムの帽子なのか。右端は少年のようだ。ネパールには多くの民族が暮らしているせいか、外国人の私には、この5名が同じ民族には見えない。異なる背景を持つ5名が、同じ方向に向かって一緒に歩んでいるように見える。神の山マチャプ

チャレや大地が彼らを見守り、5名はたくましく堂々と歩いている。大きな樹木が右端に描かれていて、彼らが疲れた時安らぎを与えてくれるようだ。

この絵は、今我が家の玄関を入った正面に飾られている。この絵を見ていると、私は清々しい気持ちになり、世界に飛び出したい気持ちになる。異なる文化を持ち、世代も違う地球人である私たちが、広い大きな世界で、手を携えて同じ目的を持ち共に進むことができたらどんなにいいだろう。この絵と私の理想が重複し、青臭いようだが、絵が私に「前向きに頑張れ！」と励ましてくれているような気になる。第19回の理事会を終えた e-dream-s。メンバーの1人としてこれからも力強く前進していきたい。今日も、私の絵は玄関で私に「いってらっしゃい」と呼びかけている。

註1：大原の里から黒木や木工品などを頭にのせ京都の町に売りに来る女。黒木売。おおはらめ。（「広辞苑」による）

註2：ちぎった色紙(いろがみ)を台紙に貼って描いた絵。（「広辞苑」による）



PTA 新聞の話し合いで、夜遅くまで PTA の役員さんと話し合っていると、生徒の食堂の利用についての話になった。Y くんのお母さんが、「うちの子は、荷物が多くなるから弁当はいらんって言うんですよ。だからいつも学校の近くのラーメン屋ですませてるみたい。」と行った。私の勤務する学校は、単位制高校で、生徒は自分のスケジュールに合わせて時間割を作る。授業以外の時間は、コンビニに行こうが、ラーメン屋に行こうが、自動車学校に行こうがかまわない。そのお母さんは続ける。「でね、このあいだ、E さんにラーメンおごってもらったらしいのよ。たまには、こうやって若い人とラーメン屋に来るのもいいなあっておっしゃって。」E さんとは、62 歳のうちの生徒である。定年退職後、これまで一生懸命働いたから、これからは自分のために生きるのだと、昨年本校を受験し、見事合格した。昨年、手術で 1 ヶ月ほど入院された時以外は欠席もなく、その熱心な学習態度には頭が下がる思いである。

授業が始まる前も、休み時間も、掃除時間も、E さんの周りにはいつも人の輪がある。10 代の生徒にとっては、同年代の生徒と接するよりもうんと年上の E さんと一緒にいる方が緊張感もなく、過ごしやすいのかもしれない。E さんのいるところには、なんとなく穏やかな時間が流れている。授業が始まる時間が近づいたので教室に入ると、E さんが後ろの生徒に「机の上のお菓子片付けとき。また先生に怒られるよ。」と言っていた。その生徒は、前の時間、私にしかられた生徒である。私が言っても、「わかつとる！」と言り返されるところだが、E さんには「うん」と、素直に従っていた。E さんの柔らかな雰囲気をも身につけたいと思う。

いつもは「鈴木くん」「山本さん」などと生徒を呼んでいる私も、ALT とチームティーチングするときには、「Hello, Takashi!」などと言う。とはいえ、E さんをファーストネームで呼ぶのははばかりされる。でも、ある時 E さんは、「どうぞ遠慮せんで、T って呼んでください。先生と生徒なんですから。」と言った。T とは、E さんのファーストネームである。とはいえ、やはり自分よりうんと年上の人をファーストネームで呼ぶことはできないでいる。「生徒」とはいえ、うんと人生経験の豊富な E さんから学ぶことは多い。そんな「生徒」を前に、「先生」は反省するばかりである。

手術後のEさんは、息が上がるからと、学校の前の長い坂や4階までの階段を、何度も休憩しながらあがっている。とはいえ、疲れた顔など見せず、ジーンズや綿パンの上に、マドラスチェックやボタндаウンのシャツを爽やかに着こなして、毎日笑顔で学校生活を送っている。そんな姿に、一緒に学校で生活している我々は、「私もがんばろう！」と大きな勇気をもたらしている。

ドキドキの理事会

矢神尚久

今回理事会終了後の昼食を手配するよう依頼を受け、「う～ん、これは大役を仰せつかったなあ。みなさんに満足してもらわなければあとで何を言われるか・・・。」大変なプレッシャーのなか私の頭脳はいつになく高速回転であれこれと考えていた。「頼まれごとは試されごと」わたしの座右の銘である。ここで「よかった」と言ってもらえるよう、私の引き出しや人脈をフル動員させていくつか候補を挙げた。そして最終的には「洛翠」でいくことにした。ここはだいぶ前に井川先生に紹介したことがあったが、庭の工事で利用できなかったという経緯のある場所である。そこを井川先生からリクエストがあったということに驚いた(覚えてたでえ・・・)。実際、理事会よりも私の今回の役割はこの昼食会場と心得ていたので、理事会が終わってもまったく落ち着かなかった。

いよいよ当日。理事会後タクシーで洛翠へ向かい、そして到着。みなさんの反応が気になってドキドキ。はじめにおかみさんのガイドで洛翠自慢の庭の散策。「きれ～い」「ほ～」

「これはすごいなあ」等、いい反応の言葉にまずは一安心。つづいて食事。庭の見える個室に通され、三段重ねのお弁当が運び込まれる。見た目も京都らしさがにじみ出ていていい感じだ。みなさんの反応は・・・「うわぁ～おいしそう！」上々だ。やっと私も心から安堵して食事をいただいた。

いろいろなところでいろいろなおいしいものを食べてこられたグルメな方々を満足させることのプレッシャー、はっきり言ってしんどい。来年はこのプレッシャーから開放されると思いきや、なんと鹿児島開催?!という話が持ち上がり、まだまだ勘弁してもらえそうもない・・・。「頼まれごとは試されごと」まだまだ続きそうです。

社会復帰！？

田辺恵美

「帰りに買い物をお願いします。トマト、キャベツ、焼きそばの麺・・・」夫の携帯へメールを打つ。夫は仕事帰りに買い物をするのが、ほぼ毎日の日課になった。人に何かを頼むよりは自分でするほうが早いし、そのほうが好きだった私だが、今はそうはいかない。4月に出産して以来、約2ヶ月間、ほとんど外出もせず過ごしてきた。家の中で、赤ん坊の世話に明け暮れる。時折、ベランダに出て外の空気を深呼吸。

世の中、便利になったものだ。一步も外へ出ずとも生活は出来る。食材は、週に一回の生協の宅配を利用し、足りないものは、夫に頼む。夕食は冷凍食品やレトルトのお世話になりながら、なんとか準備する。通信販売もよく利用する。ベビー用品から日用雑貨、出産祝いのお返し等、なんでも家にいながらにして買い物をすることができる。支払いは代金引換が便利。なんせ、家まで集金に来てくれるのだから。

とこういう具合に、産後はいわば自宅での『軟禁生活』を送っている。一時的に社会と隔絶された世界に過ごしている。忙しく喜びも多い毎日だが、何か物足りなさも感じる。そこでふと考える。自分にとっての社会とは何だろう。社会とは、人との関わりの中で自分が活躍できる場所。仕事もそうだし、e-dream-sの活動もそうだ。

久しぶりにパソコンのメールを開く余裕が出来た。e-dream-s 関係のメールがたくさん届いている。一つ一つ読んでいくうちに、少しずつ社会との距離が近くなった気がした。まだまだ社会復帰とはいかないが、自分の出来る範囲で関わっていきたいと思う。まず e-dream-s 通信に原稿を書くことにした。近況報告も兼ねて・・・。

P.S. 産休中は、いろいろとご迷惑をおかけしています。おかげさまで、4月14日に無事、男の子を出産しました。慣れない育児に四苦八苦する毎日ですが、母子ともに元気に過ごしております。



編集後記

嬉しいことにたくさんの方に寄稿していただきました。昔の自分を思い、今の自分を見つめ、そしてこれからの自分を思い描いていることが共通していると感じました。一人一人が描く夢が e-dream-s の夢になっていくのですね。

(岡田かおる)